

ジョン・ダンの復活のヴィジョン

(英語教育講座) 竹永雄二

John Donne's Vision of Resurrection

Yuuji TAKENAGA

(平成25年7月24日受理)

はじめに

John Donne (1572-1631) (以下、ダンと略す) の1623年の大病の経験を基にして書かれた詩であると推定されている (Bald, 450) ‘Hymn to God my God, in my Sickness’ を、ダンは彼自身に対する遺言の言葉で締め括っている。

And as to others' souls I preached Thy word,
Be this my text, my sermon to mine own,
Therefore that He may raise, the Lord throws down.
(28-30)

最後の一行「神は起こすために、投げ下ろす」はダンが自身に対して選んだ言葉であり、説教である。病気というコンテキストでは、「起こす」とは病気の回復であり、「投げ下ろす」とは重病に陥ることを表し、一般的な宗教的コンテキストでは前者は天上への復活、後者は苦難に満ちた現実世界での人間の生活を象徴していると思われる。ここで確認しておきたいことは、第一に、病気あるいは苦難に満ちた生活から復活すること (魂の復活) が最後の審判における復活 (魂と肉体との同時の復活) を約束することをダンが確信しようとしていることである。第二に、現実世界の様々な出来事 (ここでは病気) に込められた神の言葉を読み取ることが現実世界における魂の復活を可能にする営みと考えられていること

である。例えば、この詩においては患者の体は「地図」であり、熱は新世界つまり神の国に至るための「海峡」とメタファー化され、平面図の西と東が地球儀に重なり一つになるように、西 (肉体の死) は東 (魂と肉体の復活) に結びつくことと確信されている。このように病床の肉体は神の言葉が込められたテキストと見なされているのである。この詩と同じ病気を基にして書かれたと推定される散文作品、*Devotions upon Emergent Occasions* (以下、*Devotions* と略す) ではこの二つの特色がさらに構造化、体系化されて表されていると思われる。このような視点から、以下 *Devotions* について考察する。

I 復活についての諸説

はじめに、ダンの終末観の位置づけを明らかにするために、Kremen, K. R. 著、*The Imagination of the Resurrection* を基に、その起源である聖書の終末観、及びその後の17世紀に至るまでのキリスト教史における代表的な神学者の終末観を概観する。

1) 旧約聖書の終末観

旧約聖書の終末観においては、復活はまず個人の不滅の生命への願望として現れる。復活の主題の基本的な構成要素は正義なる人間は不滅の命を持つということである。次に、もう一つの基本的な構成要素である、イスラ

エルサレムの民の集団的復活が実現する救世主の王国への予言が加わる。イスラエルが地上の王国エルサレムとして再興するという予言である。この国家的再建を実現するためには、個人の倫理的再生が鍵になる。この個人と国家の運命の相互的關係が旧約聖書の予言の特徴となっている。旧約聖書は現世における倫理的再生を主に取り扱っていて、死後の命はわずかしか扱われていない。(29-34)

2) 新約聖書の終末観

新約聖書の終末観を決定する重要な出来事はイエス・キリストの復活である。それは人間の再生を約束するものとなっている。使徒行伝に従えば、時間的には、キリストの受難、復活、再臨、キリストによる生ける者、死せる者全ての人間に対する最後の審判、復活して天上の王国での永遠の命と続く。ヨハネの黙示録によれば、終末の三つの出来事、再臨、審判、復活は二度起きるとされる。一度目は現在の出来事として起こり、そこでは魂が復活した個人はキリストと密接な交流をする。二度目は未来の出来事として起こる。ヨハネは現在の信仰が未来の最後の審判を決定する上で重要であると教えている。(38-40)

Verily, verily, I say unto you, He that heareth my word, and believeth on him that sent me, hath everlasting life, and shall not come into condemnation but is passed from death unto life.

Verily, verily, I say unto you, The hour is coming, and now is, that they that hear shall live. (John. 5: 24-25)

2)-1 パウロの終末観

復活に関する新約聖書の教えの中でも、『パウロ書』は死すべき「自然の肉体」から不滅の「霊的肉体」への変容に関するキリスト教の原理を明瞭に説明している。パウロはキリストの復活が新約聖書における救済の土台となっているのみならず、人間の復活の重要な形となっていることを『コリント人への書1』等の中で教えている。(40-41)

『ローマ人への書』では、パウロは信仰が救済を確かな

ものにする事、洗礼は復活したキリストを通して個人の再生が可能となることを示すためのキリスト教信仰の儀式であることを強調している。ここには、キリストへの愛を通して現世において精神的復活を実現すること、この現世における精神的復活が最後の審判における肉体の復活の前兆となるというパウロの考え方が流れている。(41-45)

2)-2 黙示録終末観

『ヨハネの黙示録』は終末の出来事、再臨、救世主の王国である千年王国への最初の復活、王国の崩壊、最後の審判に向けての全ての者の復活、新しい天地の創造、救われた者が復活し天国の都市、新エルサレムで神と共に暮らす永遠の生命が予言されている。旧約聖書の終末観との違いは、旧約聖書の終末観では、地上にある救世主の王国への復活が強調されているが、新約聖書の終末観では、天上の神の王国への最後の復活が祝福されている点である。復活に関しては、この『黙示録』では三つの復活が語られている。第一の復活は正しいキリスト教信仰者の千年王国への復活である。第二の復活は最後の審判に向けて生者および死者全ての者の肉体と魂の復活である。第三の復活は救われた者の神の聖なる都市、新エルサレムへの復活である。そこでは復活した者は滅びることのない精神的肉体に変容し、永遠の命を得る。**Kremen** はアウグスティヌスおよびダンはこの三つの復活という説に従っていると判断している。(45-50)

3) 聖アウグスティヌスの終末観

キリストの肉体的復活が人間の永遠の生命への復活のモデルであるとする。復活は2度起きるとされ、第一の復活は洗礼による魂の復活であり、第二の復活は最後の審判による肉体と魂の復活である。第一の復活は神の言葉を聞き、キリストを信仰することで始まるこの地上における精神的復活である。第二の復活は肉体と魂の復活であり、神の国に至るキリスト教徒の最後の復活である。この復活観、第一の精神的復活をした者、神の言葉を聞き、それを信仰した者のみが第二の肉体と魂の復活を約束されるという考え方は、『神の都市』に繰り返し現れている。**Kremen** はアウグスティヌスの復活の教義はダンに大きな影響を与えていると看している。(57-63)

4) 聖トマス・アキナスの終末観

アウグスティヌスに従い、トマス・アキナスも第一の復活と第二の復活を区別している。第一の復活に関連して、魂は死後肉体から分離すると即座に審判を受ける。最後の審判の日に、全ての人間は同じ肉体で甦り、魂と再結合し、共に審判を受ける。善行を積んだもののみが永遠の命に赴く。甦る肉体は現在の人々のそれぞれの肉体である。第二の復活では、質的变化をした肉体は不滅となり、腐敗することはないと考えている。この第二の復活は人間の望みの完全なる成就であり、人間の神との祝福された一体化であると考えている。(64-66)

5) ルターの終末観

ルターの主たる関心は死後の生活より現在の生活にあり、彼の教義の中で終末観の占める割合は低い。彼の終末観はカトリックの終末観とあまり異なっていないが、聖書の言葉を通してのみ神は人間に働きかけるという彼の言葉の神格化が彼の終末観とも結びついている。ルターはキリストとの結びつきが弱いと言う理由で『黙示録』をあまり高く評価していない。キリスト教徒は救済を受けるために今行動すべきだと言う彼の教えは、キリストの再臨を間近なものとして予測しているからではなく、信者は皆キリストに従い、神の言葉を聞くための自由と責任があると確信しているからである。初期の教父たちは『黙示録』を文字通り解釈し、アウグスティヌスはそれを秘跡として解釈したが、ルターは寓意的に解釈したのではないかと、Kremen は看ている。さらに彼は、ルターのこの寓意化は個人の聖書との直接的結びつきの重要性、神と人間の仲介者としてイエス・キリストそのものである言葉の神格化から来ていると考えている。(66-69)

6) カルヴァンの終末観

宗教改革においては、復活の教義は論争されることなく受け入れられ、それゆえ復活の証明よりも復活をどのようにして実現するかという問題、さらに審判の基準が議論された。またプロテスタントの救済論は個人的、象徴的解釈により開かれていた。カルヴァンの終末観はカトリックの教えやルターの教えと近いもので、基本的に

はキリストが復活したから人間も復活すると考えた。カルヴァンは死後、正しい者の魂は絶えず目覚めていて、肉体の復活と、神に選ばれた者と神に見捨てられた者に対する最後の審判を待ち受けていると考えた。彼は第一の霊的復活を、それは最後の復活を確証するものであるが、救済の印として彼の予定説の教義に含めている。(69-72)

II *Devotions upon Emergent Occasions* における復活

「医者が心配する」と題された *Devotion VI* は 'fear' が主題である。死に至る重大な病気であるかもしれないという不安が広がる状況の中で、「不安」のなかにどのような神の言葉があるとダンを読み取ろうとしているのか検討してみよう。

MEDITATION では、不安が考察されている。特に患者の抱く不安は大きく、医者が不安な表情を見せると、患者の不安は医者を追い越して大きく膨らみ、医者が不安を隠そうとすると、一層不安を募らせるなど、病床にある患者の不安の大きさが述べられる。次に、不安の見せかけとその実態について述べられる。一見愛のように見えるが、それは所有することの愛であり、裏返せば失うことへの嫉妬や、疑念に満ちた不安である。また一見危険にひるまない勇気のように見えることもあるが、実態は過大な評価への不安であり、評価を失うことへの不安であると述べられている。さらに患者自身の不安の矛盾についても述べられる。キリスト教徒として患者は死が早まることは恐れないが、しかし病気の悪化は恐れると言う。人間として病気への不安を否定すれば嘘をつくことになり、キリスト教徒として死を恐れると言えば神に嘘をつくことになると、患者の矛盾した心情が述べられている。このように不安の二つの側面を明らかにしながら、最終的には次のように述べている。

... but as my physician's fear puts not him from his practice, neither doth mine put me from receiving from God, and man, and myself, spiritual and civil and moral assistances and consolations. (VI *MEDITATION*)

(大意)

「医者不安は彼の治療の妨げとならないのと同じく、私の不安は、神、人、私自身から、精神的、好意的、道徳的慰めを受ける妨げとはならない」

ここでは、不安ゆえに様々な支援が一層ありがたく感じられるという患者の気持ちが率直に述べられている。最終的にはダンが不安の中に込められた神の言葉の意味を読み取ろうとしている。

EXPOSTULATION では、「不安あるいは恐怖」という言葉の様々な用例が聖書から引かれ、その意味が考察されている。幾つかの例を下に挙げる。

「神の神秘は神を恐れる者と共にある」

‘the secret of the Lord is with them that fear him’

(Psalm. xxv. 14)

「神を恐れることはその人の宝である」

‘the fear of the Lord is his treasure’ (Isaiah. xxxiii. 6.)

「恐れかつ信仰無き者は第二の死である燃える湖に落ちる」

‘The fearful and the unbelieving, into that burning lake which is the second death’ (Rev. xxi. 3.)

「神を恐れることは叡智の始まりである」

‘the fear of the Lord is the beginning of wisdom’

(Psalm. cxi. 10.)

「賢き者は全てを恐れる」

‘A wise man will fear in everything’ (Ecclus. xviii. 27)

このように、ダンが様々なコンテクストの中で使われている ‘fear’ の積極的な意味に理解を深め、次のように結んでいる。

I am abundantly rich in this, that I lie here possessed with that fear which is thy fear, both that this sickness is thy immediate correction, and not merely a natural accident, and therefore fearful, because it is a fearful thing to fall into thy hands; and that this fear preserves me from all inordinate fear, arising out of the infirmity of nature, because

thy hand being upon me, thou wilt never let me fall out of thy hand. (VI EXPOSTULATION)

(大意)

「私が病床で豊かな気持ちでいられるのは、恐怖に満たされて横たわっているからである。それはこの病気は神が即座に下された戒めであり、神の手中にあるということは恐ろしいことだからである。そしてその恐怖は同時に病気から生じる無秩序な恐怖から私を守ってくれる。なぜなら神が私に手を差し伸べてくれたからには、神は決して私を放そうとはされないからである」

ここで患者は病気を神の戒めであり、恐怖は戒めから生じていると新しい認識を示している。逆説的ではあるが戒めは復活のために為されるのであり、その意味で患者は希望と安らぎを見出そうとしている。

PRAYER では、人間の全ての喜びと悲しみを与える慈悲深い神は、希望を与えるのと同じように人間に不安を与えるのであると捉えられている。人間が恐れる最悪のもの（肉体の死）に対して患者を準備させてくれるのであるから、患者は不安を消し去ってくれるように神に求めている。殉教者たちは全く不安など見せることもなくこの世を去っていったが、キリストはそうではなかったと患者は言う。殉教者の場合は、神が力で満たしてくれたから、人間以上のこと、つまり不安を見せず死んでいくことができたが、神であるキリストは人間の弱さ（十字架上での苦痛の表情）を表して、人間であることを示す必要があったからである。このような理由から、現在の不安を恥じることが無いようにしてくださいと患者は神に祈っている。病気の熱が不信心という患者の以前の心の冷淡さを溶かし去ったとき、病気による全身の発汗が患者の以前の熱狂を冷まし終わったとき、そして不安が以前の患者の傲慢さ、無関心を矯正し終わったとき、患者が神により相応しい者となったと看做されるように祈っている。

And when thou shalt have inflamed and thawed my former coldnesses and indevotions with these heats, and quenched my former coldnesses and indevotions with these sweats and inundations, and rectified my former presumptions and negligences with these

fears, be pleased, O Lord, as one made so by thee, to think me fit for thee; (VI PRAYER)

歴史的視点で終末観を整理してみると、ダンの復活への考え方は、基本的にはアウグスティヌスの考え方に近い。現世での精神的復活、第一の復活が、来世における魂と肉体の復活、第二の復活を約束するという考え方である。一方で第一の復活を達成するためにダンが採った手法はルター、カルヴァンのプロテスタントのキリスト教観に大きな影響を受けている。つまり現実世界の全ての事象、人間が経験する日常的な出来事には神の言葉が宿っていて、それらを神の言葉として正しく読み解くこと、それによって信仰を深めていくことが信仰者の義務であり、そのようなことによって深められた信仰と喜びが地上における魂の復活となるのではないか。ダン自身の重病体験を基にして書かれた *Devotions* は、彼の終末観を探る上で重要な散文作品である。この作品の読み方について、Wilcox は次のように示唆に富む視点を提供している。

Fundamental to these poems is a view of the world which sees it as always potentially emblematic: events, sights, or experiences, however ordinary or apparently unspiritual, are bearers of the Word if rightly interpreted. (155)

(大意)

「これらの詩（宗教詩）にとって重要なことは世界への視点であり、それは世界が常に強い象徴性を持っているという見方である。様々な出来事、光景、体験は、どんなに平凡で、無味乾燥に見えようとも、正しく解釈すれば、神の言葉を宿しているのである」

「様々な出来事、光景、体験」の中に隠された神の言葉を正しく読み解くこと、選りすぐられた言語に翻訳すること、それを伝えていくことはダンの説教者としての仕事であり、かつ彼自身の第一の精神的復活を成し遂げるために実践しようとしていたことではないだろうか。*Devotions* の次の一節は神の言葉の読み取り、あるいは翻訳というダンの実践を示す好例であると思える。

All mankind is of one author, and is one volume;

when one man dies, one chapter is not torn out of the book, but translated into a better language; and every chapter must be so translated; God employs several translators; some pieces are translated by age, some by sickness, some by war, some by justice; but God's hand is in every translation, and his hand shall bind up all our scattered leaves again for the library where every book shall lie open to one another. (XVII. MEDITATION)

(大意)

「人間は全て一人の作者の手による一冊の本である。一人の人間の死は、本の一章の削除ではなく、さらに優れた言語に翻訳されることである。全ての章はそのように翻訳されねばならない。神は何人かの翻訳者を任命される。ある章は老齢により、ある章は病気により、ある章は戦争により、ある章は裁判により翻訳される。だが全ての章の翻訳に神の手が入っている。そして神の手は散在したページを再び綴じ合せ、図書館の本とする。そこでは全ての本が開かれることになるのだ」

引用した箇所は近くの教会から人の死を告げる弔いの鐘が聞こえてくる場面である。このときダン自身の病状も重篤な状態に陥っている。鐘の音に込められた意味をこのように宗教的に深く読み取っていること、死者に対して共感を寄せ、その人の復活を信じようとしていること、さらに人の死を優れた言語に翻訳されて天国の図書館で公開されること言うダン自身の翻訳力、復活を象徴するメタファーの創出、これらはまさにダンの第一の復活を達成するための実践と言えるのではないだろうか。

さらに続けて、神の言葉を探求し、読み解き、あるいは翻訳するダンの実践をこの作品の中に探ってみよう。

Devotion XIII では患者の体に ‘spots’ 「発疹」が現れ、病気が悪性の伝染病であることが分かる。まず *MEDITATION* では「発疹」にどのような意味が込められているかが考察される。

In this accident that befalls me, now that this sickness declares itself by spots to be a malignant and pestilential disease, if there be a comfort in the

declaration, that thereby the physicians see more clearly what to do, there may be as much discomfort in this, that the malignity may be so great as that all that they can do shall do nothing; (XIII MEDITATION)

(大意)

「体中に発疹が現れ、悪性の病気であることがわかった。病気の症状が現れることにより、医者ほどのような処置をすべきかがはっきりと分かる。これは患者にとって一つの安心材料ではあるが、一方医者の処置ができないほど悪性の病気であることを示している可能性もあるので、発疹は患者にとっては大きな不安となる」

現実世界では、幸福と不幸は同じ割合であるというより、不幸の占める割合がずっと大きい。それと同じく、患者にとっては、体に現れた「発疹」は病気の回復につながる安心材料になるより、病気の悪化につながるずっと大きな不安材料となる。当然のことではあるが、ここでは「発疹」は病状の悪化という意味で解釈されている。次の EXPOSTULATION では、聖書を基にして「神の言葉」としての「発疹」の意味が探求される。

When I open my spots I do but present him with that which is his; and till I do so, I detain and withhold his right. When therefore thou seest them upon me, as his, and seest them by this way of confession, they shall not appear to me as the pinches of death, to decline my fear to hell (for thou hast not left thy holy one in hell, thy Son is not there); but these spots upon my breast, and upon my soul, shall appear to me as the constellations of the firmament, to direct my contemplation to that place where thy Son is, thy right hand. (XIII. EXPOSTULATION)

(大意)

「私が「発疹」を見せるとき、私は本来の持ち主（御子キリスト）にそれを贈るのであり、その時が来るまで、御子の権利を私の許にとどめているのである。だから主よ、私の体の「発疹」を御子の物として見てくださるとき、告白により現れた物として見てくださるとき、それらの「発疹」は私の不安を地獄へと降下させる死の危機

として見えるのではなく、あなたの御子、あなたの右腕が居られる天国へと私の瞑想を導く、大空の星座の様に見えるのです」

体の「発疹」は罪の印ではなく、キリストによる贖罪の印であり、天国へと導く夜空に輝く星々と捉えられている。病気の症状を表す「発疹」が救済と復活の印に転換されている。最後の PLAYER では、この「発疹」は神がその名前を刻んだ文字であると読み解かれている。

These heats, O Lord, which thou hast brought upon this body, are but thy chafing of the wax, that thou mightst seal me to thee: these spots are but the letters in which thou hast written thine own name and conveyed thyself to me; whether for present possession, by taking me now, or for a future reversion, by glorifying thyself in my stay … (XIII PLAYER)

(大意)

「発熱は主がこの体にもたらされたのであり、私が主に属することを記すために、蠟を暖めておられるのだ。これらの「発疹」は、主が相続権を記すために自らの名前を書かれた文字である。直ちに所有するためであれ、将来の相続のためにであれ」

ここでは患者の発熱が刻印をするために暖められた蠟、発疹が神の相続権を記すための文字へと転換されている。このようにダンは「発疹」という病気の一症状の中に込められた神の言葉を読み解こうとし、「発疹」を神が記した復活を約束する印として見ようとしている。

Devotion XIXにも同様のことが指摘できる。ここでは患者は回復期にあり、回復の兆しが「雲」というメタファーで表され、聖書に関連づけながら「雲」が神の栄光につながる物であり、病気からの回復（現世における復活）を約束するだけでなく、来世の復活に対する神の刻印であることが考察されている。

But what is my assurance now? what is my seal? It is but a cloud; that which my physicians call a cloud, in that which gives them their indication. But a cloud? Thy great seal to all the world, the

rainbow, that secured the world for ever from drowning, was but a reflection upon a cloud. A cloud itself was a pillar which guided the church, and the glory of God not only this was, but appeared in a cloud. (XIX. EXPOSTULATION)

(大意)

「私を安心させてくれるもの、回復の印は何か。それはただの雲、医者たちが「兆し」と呼ぶもので、病気の回復の兆候を示すものである。ただの雲であろうか。世界の復活の印、洪水からの安全を約束した虹は、雲に現れた光の反射ではなかったか。雲は教会を導いた柱ではなかったか。神の栄光は雲の中に現れたのではなかったか。」

And as soon as Aaron spoke to the whole congregation of the people of Israel, they looked toward the wilderness, and behold, the glory of the Lord appeared in the cloud. (Exodus 16. 10)

『出エジプト記』の挿話を基に、不確かな「雲」(兆し)の意義が高められている。

さらに『列王記1』の挿話を基に「雲」の意義が高められている。雨の兆しを探して沖合を見るようにという船員に対するエリアの7回の指示が、闘病期間が7日目であることに結びつけられている。

Let me return, O my God, to the consideration of the servant Elijah's proceeding in a time of desperate drought; he bids them look towards the sea; they look, and see nothing. He bids them again and again seven times; and presently they had their desire of rain. Seven days, O my God, have we looked for this cloud, and now we have it; none of thy indications are frivolous, thou makest thy signs seals, and wheresoever thou mayst receive glory by that way. (XIX. EXPOSTULATION)

(大意)

「厳しい干ばつ時におけるエリアの対応の考察に戻ってみると、彼は船員たちに沖合を見るように指示した。船員たちには何も見えなかった。彼は何度も見るように、7回も見るように指示した。7回目に沖合に雲を発見し、

間もなく、彼らが望む雨が降ってきた。7日間この回復の兆しである「雲」を探し、今それが現れた。神が示す前兆に無意味なものではなく、この印を回復の刻印とされる。このようにして、神は至る所でその栄光を受けられる」

*Oxford English Dictionary*に‘cloud’の医学的な意味を見つけることができなかったが、病床というコンテキストでは「雲」が具体的に意味するものは、体の上に表れたまだら模様ではないかと想像する。病気からの不確かな回復の印を、来世での復活の約束に結びつけようとしている。ここでも同じく復活の印が探求されている。

結論

これまでの考察から、新旧約聖書およびその後17世紀までのキリスト教神学者の主な考え方は、第一の復活つまり現世における精神的復活が、第二の復活(最後の審判における魂と肉体が一緒になって復活し、新エルサレムで神と共に永遠に暮らすこと)を約束するというものであった。また現世における復活のモデルは、キリストの復活であること、復活のためにまず人間にとって必要なことは信仰であること、特にダンが生きた時代のプロテスタント、特にカルヴァンの「予定説」の教義においては、経験な「信仰生活」を送るということが、復活を予定された人間であることを確信させるものとなっていることが明らかになった。プロテスタント教義では、信仰における神の言葉、特に聖書における神の言葉が重要になってくること、さらに日々の様々な出来事、経験の中に神の言葉が宿されており、隠れた言葉を正しく解釈することが、信仰の最終目標である人間と神との一体化を成し遂げるための人間に可能な日々の実践であることが明らかになった。そして様々なレベルでの人間と神との一体化の経験が現世における魂の復活であり、「予定説」の立場から言えば、第二の復活を予定されていることを信仰者に保証するものとなる。

ダンの詩、散文を広く概観すれば、恋愛、友情、信仰において対象との一体化を成し遂げようという強い願望が全体に一貫している。特に復活というコンテクストから見れば、それらは第二の復活(天上における神との一体化)を約束する第一の復活(地上における神との一体化)の探求という営みではなかったろうか。

ダンが一時危篤状態に陥ったとされる (Bald, 450) , 1623 年の大病は、彼にとって第一の魂の復活を成し遂げ、第二の復活を確信する絶好の機会となったとも言える。全体で 23 からなる Devotions は、それぞれ MEDITATION, EXPOSTULATION, PRAYER から構成させているが、それぞれの内容は、MEDITATION では主に病状の進展とそれに対応する人間の現世における厳しい生活の状況、EXPOSTULATION では病気の症状、その体験が意味するものは何かという神への問いかけ、そしてその答えを探すために聖書の神の言葉の考察、PRAYER では新しい認識と現実の受容に基づいた神の恩寵への祈りとなっていることが確認された。この作品は正に肉体の死という危機に直面して、神の言葉の深い理解を図り、神との一体化を日々実感することにより魂の第一の復活を成し遂げようとするダンの信仰の実践記録となっているのではないだろうか。

参考文献

- Bald, R. C. (1970). *John Donne A Life*. Oxford: Clarendon Press
- Donne, J. (2008). *Devotions Upon Emergent Occasions*. BiblioBazaar
- Kremen, Kathryn R. (1972). *The Imagination of the Resurrection*. New Jersey: Associated University Press.
- Smith, A. J. (Ed.) (1971) *John Donne The Complete Poems*. Penguin.
- Wilcox, Helen. 'Devotional Writing' . Guibbory, Achsah. (Ed.) (2007). *The Cambridge Companion to John Donne*. Cambridge University Press. (pp.149-166)